

第3回支部理事会・研究会報告

　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　理事長　福井　直美

　２月２６日の第３回支部理事会・研究会、並びに臨時総会には大勢の皆様にご参加いただき開催できました。今回はハイブリットでの会になるというご案内を差し上げましたが、相変わらずのコロナ感染拡大中であり、会場である大妻女子大学には３００人収容のところ、２０名あまりの参加ではありましたが、久々に会員が集え、和やかな中に年度の締めくくりとなりました。

　この２年間はリモートによる会でしたので今後は、出来る限り会場で顔を合わせて行いたいと思っていますがリモートの良さも継続し、会員の皆様のニーズに合わせて参加ができるように、集合とリモート参加が選択できるハイブリット型を取り入れて参ります。

　今回はその１回目ということで、大妻会場・文部科学省・リモート参加者をつなぐことができるかドキドキの開幕でした。大妻会場にリモート参加の方の挨拶が直ぐに流れなかったり、研究会の最後の謝辞が突然切れて失礼な終わり方になってしまったり、想定外のことがありハラハラでしたが、皆様にお伝えしたいことはすべて配信できたことはよかったと思います。

　文部科学省からリモートでご講演いただいた小久保篤子調査官のお話は、途切れることなく画面共有もでき安心して拝聴でき多くのことを学ばせていただきました。

　会員の皆様からチャットでいただいたご感想の一部をご紹介いたします。

〇アサガオの事例では幼稚園と小学校で支柱の立て方でも違いがある話は分かりやすかったです。

〇記録を取ることの大切さやその要点が明らかになりました。

〇幼児教育の現状と課題をわかりやすく教えていただきありがとうございました。記録を取る意味を再認識できました。職員にもしっかり伝え、専門性の向上につなげていきます。

〇現場をよくご存じの先生の話は具体的な事例を交えてくださりわかりやすかったです。

今、私は文部科学省の「幼保小の架け橋プログラム特別委員会」にオブザーバーとして参加させていただいております。義務教育開始前後の５歳児から小学校１年生の２年間は、生涯にわたる学びや生活の基盤をつくるために重要な時期です。子供たちが幼稚園・保育所・認定こども園それぞれの施設で育てた力を次のステップである小学校につなぎ、子供の成長を切れ目なく支えるために、幼保小の円滑な接続を、より一層意識して、教育の内容や方法を工夫することが重要であるという考えのもとに議論が進められています。

今後、各自治体を中心にモデル事業が実施されていく方向にありますので、公立・私立、幼稚園・保育園・こども園と、すべての幼児教育施設に属する会員の会である全幼研の皆様には、それぞれの地域で、積極的に参加していただき、幼児教育の質とは何か、育ってほしい姿とは何かについて、具体的事例をもとにわかりやすく、教育委員会はじめ小学校、地域社会に語っていただくことを期待しております。

次は５月の総会で役員改選、８月には７０周年を記念する東京大会へと続きます。

これからの時代を生きる子供たちが幸せに生きていくために、常に幼児教育の未来・全幼研の未来に向けて、会員の皆様とともに頑張ってまいります。

今回の反省を生かし、総会のハイブリットがうまくできますように準備をしてまいります。令和４年度も全国の会員の皆様と心がつながる充実した会になりますことを願い、報告とさせていただきます。